京都・顕真学苑法話

Kyoto-Kenshingakuen Collected Sermons

第三法話「信心の虚空と經籍の箱」

the third sermon

The Space of True Faith and the Caskets of the Buddhist Scriptures

「笛の音のぬしの戸見ゆる白菊の白き畑の夕月夜かな」

（梅原眞隆歌集『曼珠沙華』明治三十四年、眞隆十七歳）

（與謝野晶子選者「萬朝報」歌壇　第一回入選）

冷え透った空間に、月の冴え渡る季節となりました。
京都の碧空を穿つ照葉を愛でるために、
全国から観光の方々がいらっしゃる行楽日和の休日に、
ようこそ法話会にお参り下さいまして、ありがとう存じます。
どなたもご存じのことでございますが、
秋の葉の色が変わり、やがて散ってゆきますように、
色は移ろい、形あるものは滅びます。
ですから、決して揺らぐことのない根拠というものが仮にあるとすれば、
それは色も形もない何かでなければならない、と私は考えるのでございます。
本日はこの色も形もない信心につきましてお話いたしたく存じます。
みほとけのみ教えが説かれる経・律・論の類に限らず、
およそ学問という名前の付くものは皆、
無数の無名の人間による、無数の時間の思念が累積したものでございまして、
それらの思念の基盤となるものは、名状し難く廣大無邊の、
久遠の心とも言うべき何かなのでございます。

今回ご説明いたしますのは、お正信偈の
「獲信見敬大慶喜　即横超截五惡趣　一切善惡凡夫人　聞信如來弘誓願
佛言廣大勝解者　是人名芬陀利華」でございます。
本日の法話の経典解釈は、
梅原眞隆『大藏經講座１７　正信偈・歎異鈔講義』
（昭和八年五月十五日初版発行）
梅原眞隆選集『親鸞教學』（昭和二十七年十月廿五日發行）
梅原眞隆『教行信證新釋』巻上（昭和三十年十一月二十日發行）
梅原眞隆『教行信證信釋』巻中（昭和三十二年四月十五日發行）に基づきます。

最初の二句「獲信見敬大慶喜　即横超截五惡趣」につきまして申し上げますと、
先ず、「獲信」とは信心を得るということ、
「見」るとは、こころに佛力の尊さを思い浮かべること、
そして、「敬」虔と「慶喜」をおこすならば、
即ち大いに喜び、敬うならば、信じる一念のときに、
「即」とはすぐにということ、「横」とは他力のことで、
この他力のおはからいによって、
「五惡趣」という五つの迷いの境界をたちこえて、
お浄土に往生する身となる、という意味でございます。
「即横超截五惡趣」の「五惡趣」とは、
天上、人間、畜生、餓鬼、地獄の五つの世界のことでございます。
「横超」と申しますのは、
「横」とは如来の願力、つまり如来の願いのお力のこと、
「超」とは生き死にの大海の容易く超えて、
無上大涅槃のみやこ、お浄土に入ることでございまして、
どちらの語も他力を意味しているのでございます。

信心とはみほとけから賜るものでございまして、
みほとけの他力によって信心を賜るということは、
浄土真宗における最大の神秘、最高の不可思議であると私は考えます。
信心とは一体如何なるものとお考えでしょうか。
一般に、何かを信じますには、何らかの確実な根拠が必要でございます。
本日は、私が子供の頃に気付きました、
信心の根拠、礎（いしずえ）にあたるものにつきまして、
お話させていただきたく存じます。

子供の頃、私は佛様やお浄土についての数多くの疑問を、
次から次へと祖父に質問いたしておりました。
質問から質問へと、数珠つなぎの質問の連鎖の果てに、終いに祖父は、
「それはお経に書いてある」と答えて下さいました。けれども、
「お経に書いてあることは、どうして正しいの？」という私の質問には、
祖父は何故か答えて下さいませんでした。
恐らく、自分で考えなさい、ということだったのだろう、と今の私は考えます。
子供の私の、佛様やお浄土についての数多くの質問の連鎖は、
「それはお経に書いてある」という言葉で、
ついに行き止まりになってしまうのでございました。

しかし、この質問の行き止まりについての答えは、
不思議な形で、みほとけから私に自然に暗示されたのでございます。
（「自然（じねん）に」、とは、「自」はおのづからという意味、
「然」とはしからしむという意味でございまして、
私の計らいではなく、みほとけの御計らいのなさしめたまうことにより、
という、「必然に」と同じ意味でございます。）
[梅原眞隆選集『親鸞教學』（昭和二十七年十月廿五日發行）中の
「大經に開顯せられし他力名義」（昭和二年六月）]
それは、子供の私に叔父が作ってくれました、千代紙の紙箱でございました。
叔父は工作が得意でございました。
一つ例を挙げますと、叔父は自分で竹を薄く削り、微妙なカーヴをつけて、
薄い竹の板の角もやすりで丸くして、大変良く飛ぶ竹とんぼを作りました。
またお数珠や根付の組み紐も、大抵叔父が作っておりました。
実際、叔父の作りました竹とんぼは、あまりにも良く飛びましたので、
寺の境内で飛ばしておりましたところ、
屋根を越えてどこか遠くの果てに飛んで行ってしまい、
惜しいことに行方不明になってしまう程でございました。
その叔父が或る時、子供の私に、手のひらにのる程小さい、
千代紙を折って作られたお手製の紙箱をくれたのでございます。

千代紙の紙箱の蓋を開けますと、中には、
紙箱に丁度すっぽりとはまる大きさの、
一回り小さな千代紙の紙箱が入っておりました。
その一回り小さな千代紙の紙箱の蓋を開けますと、
再び、紙箱に丁度すっぽりとはまる大きさの、
一回り小さな千代紙の紙箱が入っておりました。
その一回り小さな千代紙の紙箱の蓋を開けますと、
三たび、紙箱に丁度すっぽりとはまる大きさの、
一回り小さな千代紙の紙箱が入っておりました。
そんな繰り返しが、延々と二十回程も続きまして、仕舞いには、
小指の爪の四分の一位の、豆粒よりも小さい千代紙の紙箱が出てまいりました。
その大変小さい千代紙の紙箱の蓋を開けますと、
中は空虚、即ち空の空間でございました。
何も入っていなかったのではなくて、
中には空虚が満ちていて、空の空間があったのでございます。

勿論叔父は、子供の私に空虚や空の空間をくれた訳ではなくて、
層状に入れ子構造になった、
約二十層もの千代紙の紙箱を作ってくれたのでございます。
通常は、この実に細かい手作業による
二十層余りの小さな千代紙の紙箱たちの不思議に目を奪われて、
どうして作ったのかしら、と驚いてしまうものでございます。
子供の私にも、それは驚きでございましたが、
どういう訳か、私がそれ以上に注目しましたのは、
最後の小指の爪の四分の一程の大変小さな紙箱の中に満ちていた、
空の空間でございました。
これらの二十層余りの層状の入れ子構造の紙箱たちはすべて、
空の空間、虚空をその中心とするもの、
つまり何重にも空の空間、虚空を
囲むための構造物だったのでございます。

それから数年経ち、私は中学校に入りまして、
ジェイムズ・ジョイスの『ユリシーズ』Ｉ（現代世界文學全集１０
伊藤整・永松定　譯　新潮社版　昭和三十年四月八日發行）
を読んでおりました。その中の第九挿話
「スキュレーとカリュブディス」に、次のような文章がございました：
「それは世界即ち大宇宙小宇宙のごとく、
空虚の上に建設されたのだからです。」（同書　２６８頁）
この文章により、数年前の二十層余りの入れ子構造の、
かの千代紙の紙箱たちの思い出が再び甦り、その記憶とこの文章とが符合して、
その記憶の真に意味する所が、初めて明確に理解されたのでございます。

表面上は素知らぬ顔で沈黙しながらも、
かの層状の入れ子構造の千代紙の紙箱たちは、
「お経に書いてあることは、どうして正しいの？」
という子供の私の質問に対する答えを、
密かに曇りなく暗示していたのでございます。
古代から伝えられ受け継がれております厖大なお経の数々のお言葉は、
この層状の入れ子構造の千代紙の紙箱のように、
太古の昔から何十層にも亘って積み重ねられて来たのでございます。
そして、入れ子構造の紙箱のように、
久遠の年月に亘って層状に重ねられてきたあらゆるお経のお言葉の

すべては、みほとけのお心を語るためのお言葉でございまして、
その数々のお言葉は、みほとけの極めて微細でありながらも広大なお心の世界、
その静かに澄み渡るお心の空間を拠り所とし、
それに基づいて書かれた、と考えられるのでございます。
入れ子構造の千代紙の紙箱たちすべてが
空の空間をその中心としているように、
古代から積み重ねられてきた大量のお経のお言葉は、
ただみほとけの微細にして広大無辺なお心の世界を、
その中枢とし、その根拠としているのだ、と私は考えるのでございます。

本来、みほとけのお心と申しますのは、
過去も未来も超越され、生じたり滅したりすることもなく、
清浄で虚空に等同なお心と表現されているのでございます。
そして、大昔から伝えられております厖大なお経のすべてのお言葉は、
極まり尽くす所はみほとけのこの澄明なお心を
語るためにあるお言葉でございます。
お経のすべてのお言葉は、みほとけの空寂のお心を礎（いしずえ）として、
古代から何十層にも亘って築かれているのでございまして、
虚空を礎としているからこそ、微塵も揺らぐことはないのだ、
と私は気付いたのでございます。

以上に申し上げました、
層状の入れ子構造の千代紙の紙箱の中に満ちていた空の空間と
みほとけの虚空のようなお心の空間についての子供の頃の思い出は、
少々理解し難い事柄でございますので、
もう一つ身近で具体的な譬話をいたします。

２００７年の朝の連続ドラマは、
老舗の旅館「加賀美屋」についてのお話でございまして、
皆様も御覧になっていらっしゃったことと存じます。
そのお話の中に、老舗の旅館の大女将が次の代の女将に
女将の地位を譲る場面がございました。
その場面では、大女将が次の代の女将に、
代々の女将に引き継がれてきた玉手箱を譲ります。
次の代の女将が玉手箱の紐を解いて蓋を開けますと、
玉手箱の中は空でございました。

玉手箱の中が空である理由は、
自分で考えなければならないのでございましたが、
その解答とは、老舗の旅館の代々の女将に引き継がれてきた
玉手箱の中身は「おもてなしの心」である、というものでございました。
玉手箱の中の空の空間に満ちていたのは、
代々受け継がれてきたお心でございました。
このことと同じように、
太古の昔から代々受け継がれ積み重ねられてきた数々のお経のお言葉は、
みほとけの虚空のようなお心の空間をその中に何十層にも包み込み、
私共にそのお心をお伝え下さるのでございます。
子供の頃の約二十層の入れ子構造の千代紙の紙箱の思い出と、
この玉手箱のお話とが、不思議に一致して、
みほとけのお心の空間を、明らかな目に見える形で
私共にお知らせ下さるように、私には思われるのでございます。

但し、重要なのは、言葉の箱の包摂する虚空のお心のみではなく、
経籍のお言葉それ自体にも価値がございまして、
箱と空間、即ち言葉と心とは不即不離、不二一体であると考えられます。
すべての経籍のお言葉自体がその内奥に、あらゆる世界の実相を含み、
常にその実相を表現しているのでございます。
あらゆる経典はみほとけのお心の虚空を中枢として重層的に深く包み込み、
それぞれの経典の思想を語るお言葉の集積が、互いを前提とし、
互いを帰結とし、互いを内在させ、互いを包括している、
と私は考えるのでございます。
虚空に等同なお心の空間が、無数の言葉の累積を
明らかに澄み渡る水鏡のように映し出すのみならず、
重層的に集積した言葉の中にも、
澄明なお心の実相が内在していることが、顕かに観察されるのでございます。

後に、『性霊集』の漢詩文を読んでおりますと、
巻第一「山に遊むで仙を慕ふ詩　序を并せたり」に、
「乾坤は經籍の箱なり　万象を一点に含み　六塵を縑緗に閲べたり」
（天地は経典典籍の箱である。あらゆる形あるものを一点に含み、
色、声、香、味、触、法の六種の認識の対象は経典の中にすべて記されている。）
とございました。かの二十層余りの小さな千代紙の箱たちの記憶に
丁度当てはまる高僧の漢詩文の典拠を、

みほとけが顕かに示して下さっているように思われました。

以上を前提としまして、
私共が信心を賜るということは、何を意味するのでしょうか。
梅原眞隆『教行信證新釋』巻上　行文類　一乗嘆德には、
「悲願は喩へば太虚空の如し、諸妙功德廣無邊なるが故に。」
「誓願の一乗は大きな虚空のようである。
そのうちにこもるもろもろの殊妙な功德の廣大にして邊際のないことは、
さながら虚空にすべての物を包容するような相状である。」とございます。
『唯信鈔文意』にも、
「この如来、微塵世界にみちみちたまへり、すなはち一切群生海の心なり。」
とございます。
そして、梅原眞隆『教行信證新釋』巻中　信文類　至心別釋には、
「眞實と言ふは、即ち是れ如來なり、如來は即ち是れ眞實なり。
眞實は即ち是れ虚空なり、虚空は即ち是れ眞實なり。
眞實は即ち是れ佛性なり、佛性は即ち是れ眞實なりと。」
とございまして、信樂別釋には、
「佛性は即ち是れ如來なり。佛性は大信心と名づく。」
「大信心は即ち是れ佛性なり、佛性は即ち是れ如來なり。」
とございます。
すなわち、如來と虚空と佛性と信心とは、
等しく同一の眞實を表現するのでございます。
ですから、私共が信心を賜るということは、
この静かに澄み渡る虚空のようなみほとけのお心を賜ることを
意味するのでございます。言い換えますと、
御佛の他力と功德のすべてが、私共の内なる信心の力として、
私共の内なる生命となって現れて下さることなのでございます。
不滅の生命である深い信心を金剛心とも申しまして、
金剛心とは、ダイヤモンドに譬えられた光り輝く心のことでございます。
信心とは、ただ無闇に信じ込むようなこととは程遠い真実でございまして、
信心とは佛心そのものであり、虚空のように広大な、
光り輝く御佛の生命それ自体なのでございます。
[梅原眞隆選集『親鸞教學』（昭和二十七年十月廿五日發行）中の
「聖化の五層態」（大正十四年十一月）
「教行信證の中心問題」（昭和四年二月、京都帝國大學の樂友會館において
開催された眞宗學研究所の公開講座における速記録）]

ですから、現在の私に子供たちが、
「お経に書いてあることは、どうして正しいの？」と質問したとしましても、
それに対して私は子供たちに、今まで申し上げましたことを要約しまして、
「太古の昔から、長い長い年月に亘って重層的に積み重ねられてきた、
数々のお経のお言葉の正しさというのは、
時間的にも空間的にも無限でいらっしゃる、
自由自在な佛様のお心の世界に、不動の根拠があります。
数々のお経のお言葉の正しさは、
佛様の明らかに澄み透るお心の空間に基づいて、
その虚空の基礎の上に何十層にも築き上げられているからこそ真実なのであり、
微塵も揺らぐことはありません。
虚空のようなお心は、無数の言葉を鏡の如く映し出し、
お経の無数のお言葉もまた、あらゆる心の様相を内に深く秘めているのです。」
と、短い文章で答えることができるのでございます。
みほとけは物事の様相の鏡の裏に、私共を正しい道に導くための様々な鍵を、
曇りなく示して下さるのでございます。

それでは次に、
「一切善惡凡夫人　聞信如來弘誓願　佛言廣大勝解者　是人名芬陀利華」
をご説明いたします。
[梅原眞隆『大藏經講座１７　正信偈・歎異鈔講義』
（昭和八年五月十五日初版発行）第十章　諸佛の稱讃]
この句の意味は、
「一切善惡凡夫人」、善きも悪しきも、すべての凡夫が、
「聞信如來弘誓願」、如来の大きなお誓いと願いをお聞きして信じるならば、
「佛言廣大勝解者」、みほとけは、廣大勝解者、つまり廣大で殊勝な勝れた了解、
言い換えますと、真実の智慧をめぐまれた者であるとたたえられまして、
「是人名芬陀利華」、この人を芬陀利華、
即ち白い蓮華のようにうるわしいものであるとたたえられる、
ということでございます。

私共にみほとけの真実の生命としての信心がめぐまれるということは、
みほとけの虚空に普遍する真実の智慧（如來勝智徧虚空）が
めぐまれるということを意味するのでございます。
[梅原眞隆『教行信證信釋』巻中（昭和三十二年四月十五日發行）

信文類　明證大信]
めぐまれた真実の智慧によって、
この世に生きることと死ぬことの一大事の謎が内から解かれて、
み救いの大道が明確に知らされる、ということが、
この句に示されているのでございます。

また、お念佛をとなえる人々が白い蓮華の花に譬えられております理由は、
真実の生命をめぐまれた人は、真実に生きる人でございまして、
真実に生きるものは、真実に美しいからなのでございます。
五會法事儀讃には、この土に一人、お念佛を申すものが生まれたら、
西方のお浄土に一蓮の華がひらくということが書かれております。
天親菩薩の『浄土論』には、
お浄土とは蓮華蔵世界であると説かれておりますので、
お念佛を申す人を、お浄土を荘厳する蓮華といたしますことは、
お浄土という大きな蓮華蔵世界に統一されるということ、
みほとけのお心である蓮華が、私共の生活にめぐまれる、
廻向されるということを表現しているのでございます。
但し、その尊い価値は、如来によって私共に与えられたものでございますから、
それは誇るべきことではなくて、感謝すべきことなのでございます。

曾祖父の『大藏經講座１７　正信偈・歎異鈔講義』第十章の末尾には、
みほとけから与えられた尊い価値につきまして、
次のように書かれてございます：
「かの月は本來は土のかたまりである。
土のかたまりの月がそのまゝ鏡のやうに光るのは
日輪の光をうけるからである。
如來の御光を仰いで生きる合掌の生活は、
これに等しい風情を帶びて居るのである。」
実にみほとけは、いつも私共に密かな暗示を下さいまして、
私共を自然に真理に導いて下さるのでございます。

弦月

京都・顕真学苑副幹（顕真）